

2. 癡兀大惠墨蹟 遺偈  
正和元年十一月廿二日

一幅

八十四年 大惠(花押)

正和元年十一月廿二日

指定年月日 重要文化財 昭和五十年六月十二日

修理年度 昭和五十六年度

補助事業者 管理団体東福寺(願成寺所有)

修理施工者 岡岩太郎

修理担当者 岡興造、田畔徳一、熊倉節

一、作品概説

癡兀大惠(一二二九—一三二二)は伊勢の出身、初め比叡山に上り密教を修したが、のち東福寺開山円尔の禅風に感化され、その法嗣となった。伊勢国に安養寺と大福寺を開き、禅風を振起した。また東福寺第九世となり、塔頭大慈庵を創め、正和元年(一三二二)に八十四歳で寂した。寂後三十三年に仏通禅師と諡号された。

この遺偈は正和元年十一月二十二日癡兀が示寂するに際してしたためたものである。各字不揃いに歪んだ字形や書き直した墨痕などに、禅僧の臨終直前の壮絶さがうかがえる。本文は『大慈庵仏通禅師行状』に収められている。禅僧遺偈の代表として、また癡兀墨蹟の稀有な遺品として注目される。

なおこの墨蹟を伝世した願成寺は、大慈庵が近世末に廃寺になり、その後に興された寺である。

(本文)

「高超方□／便、自證自然、為物應世、

二、修理前の状態

本紙・表具とも横折れが甚しく、折れ山が切損しているところが多かった。その上虫喰穴、糊浮き、擦れなどが多く、掛け展示が危険な状態であった。箱も虫による一部損傷がみられた。

旧表具一文字 薄茶地牡丹唐草文金襴

中廻・風帯 白地大牡丹文透織筋銀襴(明末)

上・下 古色茶地牡丹唐草文透織(明末)

軸首 撥型木軸

法量 本紙 縦三九・三センチ 横五六・七センチ

表具 総縦一二五・〇センチ 総巾六八・二センチ

旧箱 杉屋郎箱 一合 箱書「佛通和尚遺偈大慈庵」(江戸)

三、修理の経過

1. 掛幅装を解装した。

2. 本紙裏打紙を取り去り、本紙の左方と下方に付された異質の補紙を取り去った。本紙には過去の修理で剥ぎむらがあった。虫穴も数箇所あった。

3. 本紙左方と下方の異質補紙を取り去った後へ、似寄りの時代紙を補修し、剥ぎむらも補修した。

4. 本紙裏に本紙の肌色に染めた薄美濃紙を裏打ちした。
5. 本紙折れ目に折れ伏せを入れた。
6. 表装裂地はもとのものを再用したが、ただ一文字は色褪せた茶地金欄(後補か)であったので、萌葱地松笠文時代金欄に替え、従って風帯(旧白地透織筋銀欄)もこれにあわせた。
7. 本紙・裂地とも肌裏・増裏打ちし、仮張りした後、掛幅装に付廻しをおこなった。
8. 総裏に宇陀紙にて裏打ちし、仮張りして十分乾燥期間をおいた。
9. 軸木は新調し、軸首は元のもの(撥型木軸)を付し、発装・紐は新調して装した。
10. 養生のため桐太巻軸、桐屋郎内箱、桐漆塗台差外箱を新調し、羽二重に包んで収納した。
11. 旧杉軸木に左の墨書があり、この墨蹟の伝来を示す資料として、旧箱書とともにとりはずして、新箱の底へ保存した。  
「寛永拾九年<sub>午</sub>十一月十七日表具屋高杉七兵衛安廣作」

#### 四、修理後

法量本紙 縦三九・九センチ 横五七・四センチ  
表具 総縦一二六・一センチ 総巾六八・六センチ

(大山仁快)

### 3. 木造阿弥陀如来及両脇侍坐像

三軀

中尊及び右脇侍像内に建仁二年九月、願主沙弥行西、仏師僧寛慶、執筆寛範等の銘がある

指定年月日 重要文化財(昭和五十四年六月六日)

修理年度 昭和五十五・五十六年度継続

補助事業者 無量光院(愛知県稲沢市)

修理施工者 財団法人美術院

修理担当者 松永忠興

#### 一、修理物件の概容

昭和五十二年に、奈良国立博物館によって行われた稲沢市文化財調査によって発見された半丈六の阿弥陀三尊像である。中尊及右脇侍像々内には阿弥陀三尊及五大の種子などとともに、建仁二年(二二〇二)の年記ある本格的な形式をそなえた造像銘がある。これにより、本三尊像が、本寺再興に尽した沙弥行西が大願主となり、比丘尼妙阿弥陀仏や尾張の在庁官人であろう藤原清廣、安綱等を大檀越として、仏師寛慶によって造られたことがわかる。尾張の国衙として栄えたこの地には、その歴史を反映して、現在名古屋市に移された七寺の木造阿弥陀三尊像(重文、戦災により中尊焼失)をはじめ、数多くの文化財が今に伝わっているが、その中であって、本三尊像は鎌倉初期の数少ない基準作として注目され、光背の二重円相部や台座の蓮弁など、古いものを残していることも貴重である。